

報 告

昭和四年
九月十八日 淺間山爆發報告

淺間山觀測所より見たる淺間噴火の狀況

九月十七日夜一點の隈なく澄み渡り天には銀砂子を撒きたる如く星皎々仲秋の名月は午後八時頃觀測所
前面牙山の松陰に懸りて山影明かに夜景恰も蒔繪の如く至極穩かなりき、當夜觀測所に居會はせたる者
は勤務を引繼ぎ明日下山すると喜ぶ里見助手と今日より山上勤務のため更代として登山せし渡邊技手と
火口視察後追分へ下る目的で同行せし堤技手と他に常備の小使と都合四名なり。山狀如何と前掛山を通
して淺間の噴煙を見るに當夜は更に認められず聞けば去十五日來殆ど見えざとの事此分では明朝の火口
規察は申分なきものと喜び明日は午前四時頃より登山すべく多少用意をなし其晩は十時過床に就く……
然るに草も寢沈む眞夜中過ぎ突如ドシンと急激な振動と共に異常なる音響を直感しハット目覺めサテハ
と夢中で跳ね起き時計を見れば一時八分三十三秒、次の一瞬前掛山を窓越しに仰げば中腹以上は早や眞

堤 健 六
市 川 德 一

紅に染り、火口より溢出する黒煙は天に沖し閃々たる電光を交へズドン／＼と物凄き音響は周圍の外輪山に反響し殷々囂々ヒユウ／＼熔岩の飛來する響と相和し其様殆ど名狀すべくも非ず一瞬又一瞬前掛山は約三回計りに麓迄赤化し、眞紅の火の玉は觀測所の前面を越えて飛來奔下するあり、又刻々強烈なる地響さと膽を潰す如きバチ／＼ガラ／＼と重苦しき搔音を聞く一同生死の境に立つ目下の場合暫し啞然たり、寢覺めて眼は一段と血走りさて因つたと思ひながら南側の窓近くの疊の上を歩かんとせばワリ／＼と音す、月明りに見れば窓硝子の破片を踏む、視れば三尺の硝子窓一枚は梓諸共外れ屋内に一尺程飛び机を臺にし斜に柱に寄りかゝれり（當夜は同側の雨戸は閉めず）窓より一尺餘の所に懸垂せるランプの油壺には二糶内外の穴を生じ油漏出し暗闇なり、次の數秒後戸外に出で山狀を覗えば火口より迸る黒煙はモー／＼と火口全體より吐出し直上して黒煙中には奔騰する火の流線、頻々たる電光火花縱横に入り亂れ閃々と輝くを觀る、此頃は既に熔岩の飛來止み稍々危険期を脱せしが天に冲する黒煙は刻々頭上に迫る氣配ありて何となく重苦し差當り煙の高さを測らんと思ひしが三脚付の測量機は手間取る故板壁に物差し當て、測量す其高度觀測所敷地より觀て仰角六十度時に一時十分、續いて測量機を組立て屋外に据付く、噴煙の狀況は一時二十分頃迄直上するも一時三十分には團子重ねとなり其上端の一部は南に靡き一時四十分には仰角四十一度、一時四十八分には三十六度に減じ愈々南下する量増し、又一部は北東に分離す、而して二時には噴出力餘程衰へて双方に分れる煙の量増長せしが二時十分頃には早や薄ボ

ンヤリしたる煙に變じ二時二十分には煙微かにて同三十分頃となりて山上には殆ど煙認められず、又響は爆發直後十分間計最も強烈にて漸時減退せしが一時二十分頃迄は間斷なく聞え後は荒の後の静けさに立ちかへり寂寥を感ず。是れと相前後して小諸警察署を仲介し警察電話により長野測候所へ爆發事件を急報し手分けして地震計其他氣象器械の點檢をなし一時三十分は臨時氣象觀測を行ふ、此時月は既に西に傾き星晴れなれど天頂近くには薄い卷積雲顯はれ北々西より南々東に緩行す、地上は北の軟風にて氣壓は六〇八耗（溫度更正値）を示し氣溫は五、三度にて、十七日の二十二時より一度四分、十八日六時より〇度五分高溫となる、氣溫の自記紙を檢ぶれば十七日の十九時頃より十八日六時頃迄五度附近を一度乃至一度五分内外約十分毎に鋸齒狀に描き昇降し最低は十七日の二十三時に起り一度六迄下降せり、氣壓は十七日午前六時六〇二・四耗にて遂次上昇して十四時には六〇五・四耗。二十二時に六〇七・七耗となりしが夫れ以後爆發當時迄は二十二時と大差なく水平に記象せるも爆發瞬時、三耗二直下に急降直に引返し十耗六眞上に急昇し殆ど鉛直線を描く而して爆發後は略ぼ復歸記録せり。

斯くて山手一先づ平穩に歸したれば午前三時頃より四時頃迄に觀測所附近の慘狀を見るべく一巡し更に偉大なるに驚かざる、落下せる熔岩は觀測所の南西側に最も多く六ヶ所を算へ内一個は廳舎より三間と離れざる所に落つ東南及北側に面する傾斜地にも二、三ヶ所宛落ち、内東側のものは四間程距りたる所に落下す、觀測所を中心として約三十間以内に落ちたる熔岩は十三四個ありて觀測所より一丁程下の峰

の小屋より上三丁程大の山館迄に至る三、四丁の距離を一圓とする區域内に約四十ヶ所の落下熔岩あるを見る、而して是等の熔岩は總て硬質凝灰岩暗黒色を呈し大部分地中に埋り一米乃至二米の徑を有するもの、如く何れも火口の方に長軸を有する橢圓摺鉢狀の穴を掘り一米乃至二米に近き深さに穿つ、穴の口徑の大なるものは六米を越え小なるものも一米に近し而して埋りたるものは水蒸氣を發し割目の内部分は赤熱し二米近く寄れば温か味を感ず、降灰は痕跡を認むる程度で雨量計にたまりし量は一糎平方に一並べせし位のものにて灰白色を帯べり。

斯くの如く多數熔岩落下したれども觀測所は南、東北側の窓硝子を數十枚の破損、南向きの柱時計の停止電話用二號乾電池の柵より落下、アンテナ引込線の斷線程度の小被害に止まり、火山館にては掌大の熔岩二個板葺屋根を貫き小火を發したる位にて難を免る又峰の小屋も附近に大なる熔岩は落ちたるも屋根には落ちずして何れも殆ど被害を蒙らざりしは奇蹟的にして天祐とも謂ひ得べし、而して噴煙の高さは先の高度より火口迄の距離を二・七軒火口頂上を觀測所より五八〇米低きもとして見れば頂上より約四千百米の高さ迄達せし事となれり。(長野測候所 堤健六記)